

立原正秋

夢のあと



のあと

立原正秋

講談社

夢のあと

昭和四十四年八月二十日 第一刷発行

昭和四十五年十一月四日 第二刷発行

著者 立原正秋

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二

郵便番号 一一二

電話東京(九四二) 一一一一(大代表)

振替東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 四二〇円

落す本・乱す本は、おとりかえいたします。

Masaaki Tachihara 1969

Printed in Japan

目次

夢のあと	7
七月の弥撒 ^{ミサ}	61
枯野	87
野づら	109
ちぎれ雲	131
沙魚	161
橋の上	185
女の手紙	205
相聞歌	231

装帧 || 丹阿弥波子

夢のあと

夢のあと

一

溶けかかった雪が斑^{まだら}になっている雑木林で、棕鳥^{はくどり}が白い腹をみせて波のように飛び交っていた。雑木林には椿の木がかなり自生していた。まだらになった白い雪の上に赤い椿の花が落ちていた。棕鳥は椿の木を好んで寄ってくる、と泰子はいつだったか夫の戸田順二からきいたことがある。

小さな島で海拔三十メートルもあったから、急な坂道であった。ここまで登ってくると磯の音はきこえてこない。小さな島でもなかにはいつてしまふと島の感じは消える。楠や椎^{かし}の大木もあった。鎌倉時代からつたわっている神社もあった。弁財天を祭っていると云われていた。篠山明から、あなたは弁財天みたいなひとだな、と言われたことがあるが、泰子は弁財天を知らなかった。

坂道をのぼるにつれ、片側にあった旅館も土産品店も軒がすくなくなり、雑木林は森閑としてくる。泰子は坂道をのぼりきって平坦な頂^{いただき}にでた。ほっと肩で息をし、着物の裾を直し

た。雪どけ道だと思つて駒下駄をはいてきたが、坂道をのぼってくるのは骨が折れた。頂には燈台をかねた展望台があり、植物園があり、その周りには土産品店が並んでいたが、雪のあくる日の週日のせいにか、人影がなかった。

泰子がいまのぼってきた坂道は北側にあった。頂上から南側の坂道をすこし降った左側に、篠山明の陶房がある。北側は雪どけの水が流れていたが、南側はもう雪は消え、道は乾いていた。陽の光が美しく、島の南側は春であつた。道端には蒲公英たんぽぽが咲いていた。一週間前ここに来たときにもこの蒲公英は咲いていた。気持にゆとりがあつた。ゆとりがあるのは、わたしの氣質のせいだ、と泰子は夫と篠山のあいだを往還している自分の生身をふりかえりながら坂道をおりて行つた。

篠山の店には、楽焼らくやき、と書いた看板がさがっている。厚い板に字を彫りこんだ看板であつた。看板はこちから行つても向うからきても見えるように軒から垂直にさがっている。板の両面に字が彫つてあつた。その板に正午の陽がさしていた。泰子は看板の前でたちどまり、けつきよくは、わたしの氣質がわたしを滅ぼしてしまふかもしれない、と思つた。それはほぼ確実なことと思えた。看板にさしている陽の光はつぶらで嘘がなかった。この島の南側はいつとも明るすぎる、と泰子はおもつた。島の北側にはごまかしがあつたが、南側はいつとも陽に曝さらされていた。北側には樹木が繁茂していたが、南側は潮風に曬さらされた樹木が拉ひげた枝を空にむけて突きたてていた。それらの樹木には葉がなかった。葉が潮風でむしりとられ

ているのに、枝と幹は空を突いていた。泰子は、この島の北側を夫にたとえ、南側を篠山に譬^{たと}えたことがある。そこには陰湿の風土と乾燥した風土のちがいがあった。それは、違い、というほどの性質のものではないにしろ、^{あきらか}瞭に差があった。篠山には、潮風に葉をむしりとられた樹木のように無駄なものがなかった。

ガラス戸をあけて店のなかにはいると、炭焼にする素焼の器^{うつわ}が棚にいっぱい並んでおり、窯^{かま}が店のすみにある。

篠山は海が見おろせる廊下で仕出弁当をたべていた。仕出弁当は、島の北側の橋の手前にある旅館でこしらえていた。篠山は昼はいつもその弁当をたべていた。

泰子はストーブの上にかかっている薬罐^{やかん}をおろし、茶を淹^いれた。茶を淹れる湯の音にまじって潮の音がつたわってきた。流れが速く、一日中潮の音が絶えない場所であった。むかいの漁師町から島にかけて、浅い瀬戸の上に鉄筋コンクリートの橋が渡っている。この瀬戸は深いところで二メートルしかなく、総体に浅いせいか潮の流れが緩^{ゆる}かった。かわりに南側の海の流れが速かった。

「雪はどうだった」

篠山は弁当をたべ終ると茶をひとくちすすり、それから煙草をつけてからはじめて話しかけてきた。泰子は顔をあからめた。篠山には気づかれなかった。昨日の雪の朝、泰子はおそくまで夫の床のなかにいた。からだにはまだ夫の手の感触がのこっていた。感触がのこって

いるのに、きょう島にきたのは、心が乾いていたからである。篠山を訪ねてきたのは、ただそれだけの理由だった。それだけ、と泰子は自分に言いかけながら、この、それだけ、という心情が実はたいへんなものであることを一方では感じていた。

「陽のささない個所にはまだ雪がのこっておりますわ」

「三月なかばだというのに、こんな大雪はめずらしい。もっとも、ここでは、あくる日の午前中にはみんなとけてしまったが……」

「北側にはまだ残っていましたわ」

「五日前から島を出ていないんでな。そうか、北側にはまだのこっていたのか」

「五日間、ずうっと、仕出弁当？」

「まあ、そんなところだ。別に苦にはならない」

篠山は煙草をつけかえた。

泰子は目前にひろがっている海を眺め空を見あげた。空が澄みすぎている、と思った。伊豆半島と大島が見えた。澄みすぎた空が硬^{かた}かった。

「益子^{ましこ}に小さな家を見つけた」

と篠山が言った。

「そんな話、いままできいていませんでしたわ」

「夏はここで楽焼を売り、冬は益子に引っこむつもりでいる」

「夏しか逢えない人になるのですか」

篠山は返事をしなかった。

「益子って、茨城県にあるんですか？」

「いや。栃木県だ。東北本線の小山おやまで乗りかえる」

「ずいぶん話が急ではありませんか」

泰子は憾うらみを言った。

「あなたに話す必要のない、私の仕事のなかでのことだったからね」

篠山は、夫の戸田順二より八つ若い三十二歳だった。泰子は二人の男の中間にいた。三十六歳という女の年齢が、ここまで足を運ばせているのだろうか、と泰子は考えたことがある。中学一年になる男の子と小学校五年になる女の子がいる母親だった。母親は、橋を渡って島に一步足をふみいれると同時に女に変貌する。変りかたが自分でもわかった。島に渡り、坂道をのぼるにつれ、泰子の表情には女の妖しさがにじみでくる。そして坂道をのぼりきり、楽焼の店の前に立ったときには、自分が見えなくなってくる。その頃の自分がわかるのは、島から家に帰り家庭の主婦に戻ったときである。

一年ほど前、夫の戸田順二が、李朝の鉄砂文字の壺を買ひ、篠山に鑑定をたのんだ。篠山はまだ若いのに美術評論家として一家をなし、目ききとして通っている、という話だった。李朝の壺の鑑定をたのんだときには家に来てもらい、酒肴しゅくをだしてもてなした。そのとき、

島に窯かまをもっているといふので、いちど窯を見に行こうか、と夫が言いだし、それから間もなく泰子は夫につれられて窯を見に行った。その日、夫は、篠山が焼いた壺と皿を買いもめた。

泰子が独りで篠山を訪ねたのは、それから十日ほど経ってからである。日常品の茶碗とか湯呑を買う理由で出かけたが、泰子には、篠山が壺を鑑定にきた日から、彼が心にひっかかっていた。無駄なものを感ぜさせない男にはじめて出あった気がしたのである。

泰子は帯をしめてから部屋をでた。篠山は廊下の椅子にかけて煙草を喫んでいた。篠山が出て行ってから泰子は三十分ほどとうとしたのであった。

「いつから益子にいらっしゃいますの」

泰子は篠山のむかいがわに掛け、冷えた茶をひとくちのんでから訊いた。

「いま大工がはいっている。月末になるだろう」

「それで、夏はこちらにいらっしゃるとしても、冬は益子にこもりきりになるんですか」

「たぶんね」

「たとえば月に一回こちらに見えるとか……」

「そんな月もあるかもしれないが、だいたい益子にいます方が多くなるだろう」

「こまりますわ……」

篠山は返事をせず煙草をつけかえた。

「ここから、どれくらいかかりますの？」

「ここから上野までが一時間半、上野から急行を利用して小山のりかえで二時間半くらいかな」

「往復八時間もかかるんじゃない、困りますわ」

「こまるね」

「あなたが困るんですか？」

「夏場だけの恋人にしておけばよいではないか」

「そんな殺生ころしやうな……」

と泰子はのどまで出なかった言葉をのみこんだ。益子まで渴きを癒いしに行かねばならぬだろう、と思ったのである。篠山は日常生活に無駄の多い人間だったが、人間そのものには無駄がなかった。彼が、夏場だけの恋人にしておけばよいではないか、と言うからには、月に一度益子からこちらに出てきても、声をかけてくれることはないだろう、ということが泰子にはわかっていた。いままでもそうだったが、彼は、泰子に約束をさせなかった。このつぎは四日後に伺うわ、などと泰子が言うのと、そういう約束はしない方がよい、来てみて相手がいなければ帰る、居ればはいってくる、その方がいいよ、と彼は答えた。そんな男になにを言ったところで無駄な気がした。

「益子って、山の中ですか」

「山のなか？ いや、そうではない。低い山に囲まれた盆地といえはいいかな。いいところだ」

「そんなにいいところですか……」

泰子は自分の気質をふりかえってみた。わたしは、このひとに逢いに行くだろうか……。

帰りの雑木林ではもう椋鳥の姿は見られなかった。坂道の片側の溝を、雪どけ水が澄んだ音をたてて流れていた。

二

ゴルフ場からは丹沢山脈がすぐ目の前にあった。右方にある大山はここからは見えない。塔ヶ岳とその手前の鍋割山が、霞がかって見える。

五年前の春、泰子は夫にさそわれてゴルフをやりはじめたが、性に合わず、三ヵ月でやめてしまった。ிரい、ゴルフ場にきたことはない。夫はゴルフ場の会員になっていた。このほかに伊豆、千葉、軽井沢、黒磯のゴルフ場に出かけていた。

いつだったか泰子は篠山にゴルフをおやりになる気はないの、と訊いたことがある。

「ゴルフか。あれは、老人のやる運動だろうな。興味ないな」